

国民言語文化とは何か 1

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

垣内松三著作選

国民言語文化とは何か 1

書肆心水

国語の力（全）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

国民言語文化とは何か 1 目次

国語の力 〈第四十版〉

一 解釈の力……………	一七
二 文の形……………	五五
三 言語の活力……………	七五
四 文の律動……………	九七
五 国民言語文化体系……………	一二四

国語の力（再稿） 真実・信実・誠実の回復のために

第一章 言葉の心象……………	一五四
一 言葉を拾う……………	一五四
二 言葉の方向……………	一六二
三 言葉の坐標……………	一七二
四 言葉の分極……………	一七七
五 言葉を補う……………	一八五
第二章 形相と形態……………	一九三
一 表現の志向……………	一九三
二 表現の機構……………	二〇二
三 実存と象徴……………	二〇八
四 理会の機能……………	二二五
五 理会の深化……………	二三三

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第三章	気品と風格	二二九
一	心位の循環	二三九
二	気品の結成	二三五
三	象徴的指数	二四〇
四	象徴的形成	二四七
五	風格の連統	二五五
第四章	沈黙と談話	二六二
一	沈黙の深層	二六二
二	言葉の病理	二七〇
三	普遍と象徴	二七八
四	言葉の道理	二八三
五	談話の根基	二八八
第五章	言葉の新生	二九四
一	新生の現象	二九四
二	集合意識態	二九九
三	全機の活動	三〇六
四	集合意識性	三二三
五	言葉の新生	三三〇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第2巻目次

形象論序説

第一章 国民言語文化の統一性

第二章 体系的仮定

第三章 言語形象の科学

第四章 言語形象の哲学

第五章 国民言語文化の実践性

言語形象性を語る——自叙伝風に——

栄螺の殻 形象理論講話

素焼の瓶 続形象理論講話

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

1 表記について

一、底本には『垣内松三著作集』（光村図書出版刊行）を使用した。

二、本書の表記は現代仮名遣いとした。ただし歴史的文献、文芸作品の引用の仮名遣いはそのままとした。著者同時代の評論の引用は地の文同様に現代仮名遣い表記とした。

三、送り仮名は原典のままとした。

四、現今一般に難読と考えられるものに読み仮名ルビを適宜補足したが、読みを一つに定めがたい場合には、そのままにした（例、忽にⅡゆるがせに／いるかせに）。読み仮名ルビは全て現代仮名遣いで表記した。

五、些細な表記不統一はそのままとした（例、定着／定著、根柢／根底、モールトン／モウルトン）。ただし異体字関係にある漢字の場合は現今一般的なほうに揃えた（例、鑑／鑒）。

六、本書刊行所による補いは「」で示した。

七、第一巻所収『国語の力（再稿）』と第二巻所収『形象論序説』のそれぞれにおいて世阿弥の「九位次第」を論じたところに部分的な重複があるが、発表年に十年ほどの隔たりがあることもあり、全てそのままに収録した。

八、収録各篇の単行本刊行年は次のとおり。

第一巻 ・ 国語の力 初版一九二二年 第四十版一九三六年

・ 国語の力（再稿）一九四七年

第二巻 ・ 形象論序説 一九三八年

・ 言語形象性を語る 一九四〇年

2 「形象理論」について

垣内松三の唱えた「形象理論」あるいは「形象」の概念、そして「国民言語文化（の統一性）」という思想は、垣内松三の仕事全体を貫いている。しかしその意味するところはなかなかつかみにくく、読み進めるに従って徐々に分ってくるような種類のものである。以下はその意味するところを、あらかじめある程度つかむようとする、本書からの引用である。

「言語と精神との相関関係を「力」と認め、それを解明するために、其の「動力的統一の構造」を「形象」と名づけ、その全構造としての「形象性」を研究する理論的操作を組織的に、体系的に整序するために、幾多の学説と、多年の体験とを駆使して、この考察にあたつたのであったが、当然その中心に於てこれを統率する根源性を把握することが究竟の問題であると考えた。それを仮に「統一性」と名づけた。」（第二卷一九一ページ）

「ここに形象作用というのは、形式又は形態をいうのではなく、恰も水蒸気の寒冷のために凝結して、雪片の微妙なる形象に結晶するように、社会層又は時代層の雰囲気によって、作家の精神の内面に於ける、文学形象が結晶せられる、作用をいうのである。」（第二卷六五ページ）

「形象作用は「こころ」と「ことば」とを繋ぐ作用として顕わすことができるのであるが、「こころ」と「ことば」とは繋がれるものであって、これを「繋ぐもの」は「繋がるもの」に先行しなければならない。理會作用はこの結晶の力である。しかし「繋がるもの」なしには「繋ぐもの」を知ることとはできない。嘗つて謂つたように、雪片を手にして、その微妙なる結晶を見んとする時、掌上に在るものは一滴の水である。もし雪片の微妙なる結晶を視んとせば、直下に観取しなければならぬのである。水滴を分析して微妙なる結晶を見んとするときには、「形象」と「理會」との真相に参入するものではない。風土と歴史によりて結晶せられたる言葉の真相はこの全機を参究するのなれば把握することはできない。」（第二卷九〇ページ）

「此際、形象に配するに *Gebilde* (形像) を以てするのは、この解明に於ける一切の誤解と無理解とを誘導する原因であるらしく、もしドイツ語を対比することを欲するならば、ゲシュタルト *Gestalt* の方がそれに近いのである。本来「形象」は中世歌学に於ける「様」「姿」、更にそれを依拠とする、富士谷成章及び御杖の学説と連関し、皆川淇園、佐藤二斎、平田篤胤等のそれとも関係を有するのであって、外国語から説明しなければならぬ系譜を持つ術語ではない。形像は形象の外化の極限に於ける可聴のもしくは可視的記号の集積である。これと相對するのは、形相である。その象徴的連関が形像である。」(第二卷一五四ページ)

「解釈学を成立せしめる根基は形象性である。それは言葉の動力的統一の構造であった。国民言語文化の実践性はその条理を明証することの何何ものでもない。日本言語文化の実践性は古来「和敬」を尊び、「秩序」を求め、「進歩」を欲する心であった。そうした統一性に於ける、真実性の徹見と実践性の果敢こそ、永代遺産として国民言語文化を将来に伝えるわれわれの心構であらねばならぬ。」(第二卷一五八ページ)

「前にも少しく触れたと思うが、すでに本居宣長の学説は現代の意義学・象徴学に先立ち、富士谷御杖の学説は現象学的研究に先だつこと一世紀以前にある。この素朴な学説が、これまで充分に発展せしめられなかったために、われわれの学問の領域に於て混乱を生じて居るのである。これを整理することが、先ず形象理論の最初の課題であると考えた。

「形象」及び「形象理論」は何等外国の学説の翻訳でも、紹介でもなく、またその名義は決して伝統を無視して作つたものでもなく、少くとも我が国に於て伝統的に極めて少数の人々の間に持続せられた考えであった。とにかく、形象理論は歴史的にすでに先哲の求めたものを、現代の精神科学によって明確にせんと欲したもので、少しも突飛な学説でもなく、また何等か新奇を衒うようなものでもない。そう感ぜられるのは、約一世紀間、学問の進展方向を他に導き、伝統を無視し、世界的水準に広めて、反省しなかったためであつて、これを転回せしめて進展を図るためには、誤解と侮蔑と、同時に圧迫を予期しなければならぬ。」(第二卷一九二ページ)

国語の力〈第四十版〉

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

雪片を手にしてその微妙なる結晶を見んとする時掌上に在るものは一滴の水なり。

水滴を分析して結晶の形象を見んとするが如きは今の国語・国文学習の態度なり。

言語文学の本質を研究せんとせば先ず直下にその微妙なる形象を観ざるべからず。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第四十版序

「国語の力」を世に送ってから、もう十五年も過ぎました。この間に於ける、世相の急激なる変動は、一切の事象にもはたらきかけて居るように思われます。それにも関わらず、私は、唯「力」の一字だけを、見つめて居たような、過ぎ去った日が憶い出されます。特にこの書物を書いた時ほど、その書名を定めるのに困ったことはありません。その頃は、春も闌で、麗かな日が続いて居ました。明るい光を、閉めきった窓に遮って、電燈の下に、校正刷が真赤になるまで、筆を加えて居た書齋の中のようすさえ、ありありと目の前に浮かんで来ます。そして「力」の一字を決定しました。それは、それより二十年も前から、考えつづけて居たことを、結晶させたような、文字でありました。又それから後の十五年も、追いついて居るような出発の信号でありました。殆ど全生を、この一字にうち込んだようなものだと思うと、人間の一生の間に、何ほどの事もできるものでないと、うち砕かれたような心持になります。しかし、それは微力の致すところで、焦っても仕方がないと、肚がきまつたら、これからも、この一字を見まもって、どこまで追いかけられるか、進めるだけ進んで見るより、他に、考えようもありません。十五周年を記念し、その第四十版を刊行するに際して、改版せられるとのことであるが、それならば、原形のまま投げ出して、これまで受けつづけて来た、痛棒を更に加えられ、更に自証の教訓を得るのもありがたいことと存じます。それで、書中の「国文学体系」の五文字を「国民言語文化体系」と改めただけで、明かに誤とわかって居る文字の外は、手を加えませぬ。

この五文字を改めたのは、その方が、その章に語って居る意味を現わす題目として、適當であると思ったからであるが、それには、なお別の理由もあります。それは、「国語の力」で述べたことは、その後、十五年の間に三つの方向に延びて居ります。そして「国語の力」は、その一つの方角である、「国民言語文化体系」の先頭に

置くのがよいと思うからであります。三つの方向の一つは、「国語の力」を刊行したために、その翌年から発行せられた「読方と綴方」に続けて、私財を投じて発行した「国文学誌」及び「ユトバ」に於て発表せられた諸論文であつて、「国語の力」の理論的考察に向けられたのでありますが、それは、「日本文学理論体系」(全十二巻予定)として、書き直す考えをもつて居ります。その二は、「国語の力」の实践的考察で、それは、「国語教育科学体系」(全十二巻)として完成に近づいて居ります。その三は、「国語の力」の歴史的考察で、それが、「国民言語文化体系」として、まとめたいと考えて居る系列であります。そして、改版「国語の力」をその先頭に置くために、その最後の章の題目を改めたのであります。なお、この三系列のいずれの系列も、その微細なる系素も、既に「国語の力」の中に含まれた、「国語の力」の動力的構造の解明に向けられて居るのでありますが、「国語の力」は、「国民言語文化体系」の問題設定の位置に据えつけるのが適當と考えます。しかし、「国語の力」は、全体系の歴史的考察の一系列を引出すだけではなく、その各系列に於ける、理論的・歴史的・実践的解明の動力的中核であることには、少しも変りはありません。

「国語の力」第四十版が刊行せられるにつけて、いろいろのことが憶い出されます。それを刊行してから、余り遠からぬ、大正の終りから、昭和の始に至る数年間は、この書を出したために、身辺には暗い日がつづきました。それでも、時には、明るい光のさしこむこともなかったのではありません。昂ぶった心が、和げられるよるこびは、そこまで、突き落されたものでなければ、わからないだろうと思ひます。こんな小さな仕事でも、自らを待むのは、一切を滅ぼすもといで、外から、力をつけられなかったら、ここまで、持ち続けることさえできなかったら、今この文を書きながら、感じて居ります。この仕事は、なおこれから、長く続けなければならぬが、第一版の序に、「今後、部分的には改訂を加えることもあらうと思うが、その根柢となつて居る精神は、どこまでも主張する考えである」と、思ひきつたことを書いた心構えは、十五年後の今日に於ても、その一字をも改めようとは思ひませぬ。唯、その同じ言葉で語る心もちには、まさしく、十五年の隔りがあります。それだけでなく、それには、目当てもはつきりつかない、うつろのようなものに呼びかけて居る響きが、こもつて居るように、思われてなりません。

昭和十一年五月八日。第一版刊行の日から十五年目の同じ日に。

垣内松三

序

これまで「国語」を学ぶ人教える人から「国語」の学習に就いて、いつまでもこんなことをして居てもよいのか、と尋ねられたことが、いく度あったか知れない。併しながら同じ不安をいだいて、その答を求めて居たわたくしには、その疑いを尊重するほど、それに就いて、ありあわせの答をすることは、慎しまねばならなかった。この叢書〔国文学習叢書〕は、ようやく、その答を形に現わして見たものであるが、何となく物足らぬ感じは、自分でも、よく知って居る。しかし、今の自分の力ではそれをどうすることもできない。

この叢書で語ることが、右のようであるから、第一巻から第十二巻まで「国語」の学習の方法的考察を以て始終して居る。第一巻〔本書『国語の力』は研究法・批評学・及び言語学的諸研究・文学概論を整理して、これを『読む』という作用の上に集め、『読方』ということを実際に結びつけて、新しい仕方で話して見たいと、思ったのである。第二巻より第十一巻に至る解釈は、第一巻で主題とした『解釈』（読方・批評）を実例で証明して見たいと考えたのである。もし普通の註釈であつたら、とてもそれに従うことは出来ないのであるが、実際の問題の考え方を取扱うために、特にそれ等の作品を選択して、解釈を試みたのである。第十二巻は、それに關聯して附加えたのである。行くては遠い研究の道程に於ける第一歩を踏み出したものに過ぎない。

第一巻に就いて、なお二三のことを附言して置かねばならぬ。この書の叙説の仕方は、常に生きた心の作用を目の前に現わしたいと心がけたので、引用が多過ぎると思うほどに、そうした実例を掲げては、説明の端緒を見つけて、叙説を進めることとした。多くの小話挿入を、理論を誘導しつつ叙説を硬くならぬようにつとめたのも同じ精神であつて、そのために読者の多くが目を通して居られると思う、正岡子規、夏目漱石、又は西田幾多郎氏、芦田恵之助先生、五十嵐力氏、土居光知氏、菊池寛氏、ジェームス、ヴァント、センツベリ、モウルトン、

ヒューイ、コーエン、クローチエ等の諸家の所説に負う所が尠くない。特に記して感謝の意を表する。

この叢書に述べたことは、既に二十余年の間、唯一人で考えもし、行っても来たことであるが、それを話して見たのは、附録「本書非収録」の講演が始めてである。それは、どうしても、話さねばならぬところまで追いつめられたから、話さねばならなかったので、全くとりかえしのつかぬことをしてしまったのであるが、それから思ひきつて、その責任を明かにするために、第一巻を書くことにした。それを書き記したために新たに思いついたことも少くない。それは別に、今稿を終ろうとして居る『日本文学の形象』と『日本文学の思潮』に於て、表わして見たいと考えて居る。此意味に於て、小半日も話しつづけた長い講演の概要を筆記していただき、又それを転載することを許されたる、信濃教育会に深く感謝しなければならぬ。今後、部分的には改訂を加えることもあると思うが、その根柢となつて居る精神は、どこまでも主張する考えである。

大正十一年三月三十一日

著者

SAMPLE
Shoshi-Shinri.com

一 解釈の力

1

読む力　読むという作用は、行うということ（政治・経済・道徳）や考えるという作用（科学・哲学）と同じように、又はそれと相伴いて、人性の内面を貫きて長い歴史を有する作用である。

今日、我々は読むことに就いて少しも驚異を感じない。したがって、その作用に就いて考えて見る心も起らないほど日常のことであるが、ヒューイの『読方の心理と教育』に記るすところに依れば、リビングストンが毎日、本を読むことを異しみ且つ畏れたアフリカの蛮人が、どうかしてその秘密を知りたいと思って、とうとうその本を盗んで食って見たという小話に見える蛮人の心は、原始時代に於ける読むという作用に対する原始人の驚異を示すに足るものである。読むことは神聖なことでもあり、神秘的なことでもあり、「ヨブ」（呼ぶ）という語源と通じて居るのでも分るように、音律的な読方から不思議な力が読む人の上に在るように思われた。又 reading の語源が示すように、それは教訓を得ることでもあり、また学問ということとも同じ意味に考えられもしたのであるから、読む力が重んぜられ、読む力のある人は尊ばれ、読めない人が蔑まれるということも自然に生じ得たことである。かような読む力の歴史は我々もよく知って居ることである。（古語や外国語を読み得る力が尊ばれるとしたら、それと同じ心もちである。）併し今日、何人がかような読むという作用にそうした尊敬を捧げるであろうか。その音律的な読方は、現代の習慣となった視読から見れば、遙に鈍い浅はかな朦朧な読方である。その読方の考え方は、文字の上に表出されて居る意味を浮かみ出させるだけのことである。考えるよりは学ぶ方に傾いて居るのであるから、その意味の表出される作用や、その意味の根源や、又はその意味の価値を透見せんとす

る今日の人の読方から見れば、いかにも表面的な微温的な読方でもある。然らば今日の人から見た読む力は、これまでの習となつて居る読む力とは異つた心の力である。即ち読むことに依りて、語彙を豊富にすることや、事物的知識を収得すること等は読む力の作用の自然の結果であつて、それよりも前に先ず要求することは、それ等を読破せんとする力の欲求である。

卓越なる少数の学者がよく、「もし一々に書物を信ずるのなら本なんかいい方がよい」というように烈しくいつたのは、読方の中に考える力が欠けて居るのをなさげなく思つたからであらう。もし我々の読方が、文字を視て精しく考えることから我々自身を高めることでなければ、読むことは個性を生い立たすことでもなく、文化を深めることにもなり得ないであらう。而してこの心が覺めて我々の読方を内省する時に、我々の読む力が因襲に抑塞せられてすくすくと伸ばされて居ないことに気づいて、憤りをすら感ぜずには居られないであらう。そうしたらヒューイの謂つた「リビングストンの本を食わせた驚異に似た新しい疑問」は亦我々の問題ともなるのではないであらうか。

読方の本質 既にこの疑問に答えるために種々の研究が試みられて居る。実験心理学の方面から現われた「読方の心理」の研究は「読方の教授」の方まで進んで居る。ここに「読方教授の実際」と結びついて、学校の国語科に於ては、生きた読方を新しい時代の人々に教授しようとする作業の上に、それを現わして居る。又、それとは別の方向を進んで来た「文学研究法」に於ても、「研究の方法」又は「批評主義論」に就いてその「方法もしくは批評の批判」が考察せられて、研究の態度を正しくしようとして居る。即ち何よりも先に視点と焦点とを定めて、研究の作用を清新ならしめたいと考えて居る。この二方面はその程度に於ては差等はあるが、その本質に於て相異なるものではないので、漸々両方面から接近して来た。読方の研究は、研究法及び批評主義論等に依つて理論的基礎づけられることとなり、研究法又は批評主義論は、読方の研究から實際的に確めらるることともなり得るのであつて、この両方面から考察した批判こそ、読方に対する新しい疑問に答える答であらねばならぬ。それであるから我々が別々に「読み方」（小学校に於て）「解釈」（中等学校・高等学校に於て）「批評」（高等学校以上）という語で現わして居る作用は、固よりその本質に於ては同一の作用を指すのである。別々の言語

で現わす習になったのは、読方の程度が高くなるほど細微な研究問題が現われて、その問題の研究の仕方の上にそれぞれ専門的な作用が加わって来るからであるが、この三つの階程が連続して次第に高まる時にのみ、読方の力が完くせられ強くせられるのであって、個性の内面に連続した読方の作用の方向と見なければならぬ。故に「読方」は「解釈法」又は「批評法」であり、「批評法」「解釈法」は「読方」である。この三方面の研究は、相互に他の研究の方面を顧みることに依りてのみそれぞれの本質を明かにすることができるのである。

読方・解釈・批評の実際 然るに我々の読方・解釈・批評の實際に於ては、以上の三方面の研究の上から漸次明かになって来た理論とは打ち離れて居る。

もし小学校から順次に程度の高い学校まで進んだある青年が、自ら国語の学習を回想して見るとしたら、こうも答えるであろう。今より少し前の時代の学生は小学校から上の学校まで「国語」は何時でも文を読んで解釈して質問して教えられることを反復して来たのであった。而して国語の学力が乏しいと批難せられても、少しも批難せられて居るとは感じぬほど、自己の生活と全く離れたことのように思つて来たのであった。なぜといわるなら彼等は正直に、「国語の学習と試験」とは自分が教科書以外の読みものや参考書を読む時とは別の仕事であつて、国語の学力が無いかも知れぬが本を読む興味はだんだん覚えて来たのであつたと答えるであろう。或はこういうかも知れぬ。読方の時間は興味を以て勉強したが、中学校になつて上級に進むほど、他の諸学科に比して少し与みしやすい淡い軽侮の心さえ加わり、学習の興味から離れた倦怠した気分も起つて来た。もし上の学校の入学試験課目でなかつたら学習注意をそちらへ割こうとは考えなかつたと答えるでもあろう。高等学校以上専門学校の学生にはただ中等学校で仕来つたことが一層煩瑣になつたまでで、それも大抵、註釈や辞書を克明に見たら分ることであらうと感じたかも知れぬ。もとより全ての学生がそうであるとは思えない、又いうこともできないが、こういうように感じた青年は蓋し一人や二人ではあるまいと思う。

こうした感じをそのままに、読む力を精練することなくして国語に対する偏見を持続する人があるかも知れぬ。国語に対する偏見から、読むことに依つてのみ得らるる重要な教養の態度をすら忘れた人も少くはあるまい。読むことによりてのみ得らるる重要な教養の精神を内存せしめないために、紛然雜然と収得した知識を統

率する力を意識することなく、それを堆積し、負荷に疲れ、圧抑に痺れて居る人もあり得よう。少くともここに想像し得る読方の態度だけに就いていえば、それは、読方に就いて精しく考えて見ることも、正しい読方を練習する機会も無かったことから生れて来たものであるといつてよいと思う。

解釈の力 然らば読む前に先ず読方を考えて見なければならぬ。よく考えた読方を実習することから学力を鍛錬して自己の所有とせねばならぬ。既にいったように読方・解釈・批評作用の本質は同じことである。程度の上から問題の分化と特殊の注意を要するのである。ここには解釈 *interpretation* の力を主題とするのであるが、既に解釈を低級批評とし批評を高級解釈とした区別も「インタープレーション」という語の中には意識せられないほど融合して居るのであり、読方の本質でもあらねばならぬので、読方・解釈・批評は同義と見らるるほど親和して居るのであるから、ここにいう「解釈の力」は「読方の力」にも「批評の力」にも拡張し得る作用である。したがってその叙説の仕方も自ら両方面の研究を参酌しなければならぬ。

2

全文法 先ず読方の心理の研究を一瞥する。読方の教育は各国に於てそれぞれ長い歴史がある。これを分ちて三とすることができる。元来読方の心理的過程に於ては、先ず第一には文字を覚えねばならぬ。それと伴うて文字の訓方即ち発音の仕方を習わねばならぬ。その次に言語の結合に対する注意が現われるのである。この心理的過程はやがて読方の歴史であつて、今日に於ても其のどれかが特に強調された読方が残存して居る。併しながら現今一般に行われて来た読方は所謂「文自体」から出発する *sentence method* であつて、以上の全ての読方を綜合し「文」を以て之を統率する方法である。その上から種々の工夫が行われて居る。特に欧州大戦の後に各国で全力を挙げて努めて居る戦後の改造の精神は文化の全般にその影響を及ぼして居るのであるが、読方教授に就いての考えも、その一般の大勢から影響せられて居る。しかし各国に於てはその国勢が異なり、その改造の實際に於てもそれぞれ異なつて居るが如く、読方教授法も、これまで字句の精細な分析に力を尽くしたイギリス、ドイツなどでは、文全体の上に注意せねばならぬと考え、文全体の鑑賞に流れて居たフランスでは、文の部分である語

句をこれ迄よりはもっと精細に学ばねばならぬと考えて居るので、両方から歩み合つて一点に近づいて来て居る。その帰着点は同じく sentence method に在ると謂つてよい。今後「センテンス・メソッド」は他の方法に對した方法として共存するのでなく、それは直ちに最も自然な読方練習の出発点であるから、その内面に於ていろいろの工夫が生れて、結合せられる外に方法はあり得ないと思うのである。

全文法から見た読方 我々の読方をこの立場から反省する時に、これまで余り訓詁の方に傾き過ぎて居たことに心づくであらう。それはもとより、文字を覚える困難もあり、字音の複雑な性質にも因り、文体の整理されて居なかつたことにも因るので、専らこれ等の学習に骨を折らねばならなかつたのであるが、それ等の障碍を除くために種々の註釈や辞書やが現われて居ても、読方の實際に於ては依然として訓詁の上に力を入れて居るので、新生面が開けて来そうにもない。それを見ると、読方の新潮がひたひたと寄せて来ないのは、それ等の障碍のみに原因するのではない。読む心が眠つて居るからである、読む力が麻痺して居るからである。読方が因襲に囚われて居るからであるかとも見られる。もし正しい読方の心が動くならば、これ等の障碍を克服する力は却つてその内面より自然に現われて来なければならぬとも考えられるのである。而してそれは読方の心理又は読方教授の研究から考えても、少しずつ sentence method に近づいて行くより外にそれに活力を加える方法はあり得ない。かようにいうのは学説の上から考えた思いつきでない。長い教授の経験の上から明言することもできる。それよりも、国民の精神を浪費し浪費させる悲みの上から、祈の心に似た心を以てかくいうことを少しも疚しく感じない。

全文法の実例 学説の上から得た思いつきでないことを証明するために sentence method と見られる実例を前にしてこの趣旨を考察して見たい。読方の実例の材料となつた文は、何人も既に小学校で讀んだ「冬景色」（尋常小学読本、第十卷第九課）である。この文を読む時に行われた sentence method の実例を見ると、読方の工夫の上に啓発せられるところが少くない。而してここにこれをそのまま採録するのは、文字の上に現われて居る生々した読方の作用の展開の過程を、そのままに、あからさまに現わして見たいからである。

国語の力（再稿） 真実・信実・誠実の恢復のために

Snoshi-Shinsui.com

名
取
廣
作
に
さ
さ
ぐ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

雪片を手にしてその精巧な結晶を見んとする時掌上に在るものは一滴の水である。

水滴を分析して結晶の形象を視んとするがごときは今の言葉の考察の態度である。

言葉の本質を把握せんとせば先ず直下にその微妙なる形象を覩なくてはならない。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 言葉の心象

一 言葉を拾う

1 言葉の心象 信濃にいたころ、冬の初めから、これまであまり気にもとめなかった、読み聞く手ぢかの言葉——心象の深部までひびが入った——を拾って、静かに思い入るような日が長くつづけられた。

寺田博士が浅間山の麓で夏の日を過ごされたとき、山の頂にころがっている熔岩のかけらを拾って、それぞれの片々が地下のどの層からふきあげられたのか、それをよく見定めて、地球物理学の研究に心を潜められたことを書きのこされている。

中谷博士は低温度研究室で結晶の研究を行い、雪片の結晶について、それぞれの形の雪は、どの高度から降って来るのかを見きわめて、高層圏の研究を進めたことを語られた。

言葉を拾って、一つ一つの形を精しく考えて見ると、心のどの深さからふき上げたのか、どの高さから降って来たのか、それを見定めることができないことはない。

しかし一般に、これまで、その見分け方などは深く気にもとめられなかったが、毎日用いる言葉が相互に信用されないほどそこなわれ、そのままに見過ぐしてはならないことが目立って来ると、なるべく早くその見方や考え方を改めなくてはならない日が迫って来た。

そこで先ず手をつけられかけたのは外部からの手当である。それは明治の初めからひきつづき行われて今日に至ったのであるから、その手当の仕方にも効目も知れわたっている。文化の徐行の日にはそれでもよかったが、文化が急進して新しく立て直さなくてはならないとすると、内部から生気をもりかえし、不純なものをはねかえし

て、言葉の姿を清らかにする力をつけなくてはならない。

それにはどこにどんな手当を加えたらよいか、その大よその見通しのついたのは、ようやく近ごろのことである。内からも外からも手を加えなくてはならないが、現在の言葉のあり方は火山の大爆発の後に噴き上げられた熔岩のかげらが散ばっているような状態であり、寒波がおそって昨日も雪、今日も雪、ふりつもった雪が大地に凍りついているような事態であるから、その見分け方や考え方には、寺田博士や中谷博士が行われたような科学的処理をほどこすことを忘れてはならない。それだけでなく、心象の表徴としての言葉は物象の事物と異なり、生の交渉に於て重要な役目をもつのであるから、その中味がこれまでの約束の通りに、やりとりせられなくなつたとしたら、生きた言葉と認められない。

その頃、拾いあつめた言葉を見つめながら、ふと、こんなことを思つて見た。たとえば旧紙幣の右肩に証紙をはらなくては、その額面どおりに通用しないと定められたように、政治、経済、文化の場所でも証紙をはらなくては通用しない言葉が相当に多いのではないか、どうかすると百円紙幣に拾円券を、拾円紙幣に百円券を、もしくは証券が剥げおちて紙屑と同じことになつたような言葉がないとも限られない。そうした言葉の尖端が尖りきつて、農村でも、都市でも、軋り合つて居り、また、窓口でも乗りものの中でも、拾いとられる險しい言葉を語つて見せられると、そこにも何らかの手当てを加えなくてはならない言葉がころがって居ることを感じた。

愛の一語がどこからか聞えると、たちまち電気のように速く広く空虚のような生活空間に伝わつたのもその頃であつた。道元は、愛語は回天の力があることを語つたが、それがまざまざと目前に見えるほど言葉の世界は荒涼たるものであつた。国民相互の表現がゆがめられ、相互の理会が妨げられるような毒氣は一日も早くはらいのけなくてはならないことはわかつていても、手がつけられていなかった。

2 毀損

それにはどうしてそんなことになつたのか、その根柢をつきとめて見なくてはならない。ここにもその三つの目やすが考えられる。戦時中から、

- 1 目前の事がらについてほんとうの知識を欠くためにその空虚を語る言葉が真実性を失い
- 2 思いつきのかけ声には実行の力が伴わないから、その無力をおおう言葉が信実性を失い

3

日々の生存の見通しがつけれないのにそのぐらつきを見せまいとする言葉が誠実性を失い、そのまま戦後にずれると、このいびつになった言葉に、二度と欺されはしないと、こわばったような気がまえから、国語がひきつったようにゆがんだけわしい相を示して来た。言葉が生ける驗（しるし）を示す生ける徴（しるし）でなく、生ける徴と生ける驗の生ける証（あかし）として語られ聞かれなくなったら死滅したのと同じことである。新しい文化を導く新しい言葉はそこから生れては来ない。ただ、厳やかな事がらを直視し、確かな見こみを実行し、正しい目あてに向って前進するもののみがこの限界を踏み越えて、簡素な、清純な、正大な言葉の力を生かすことができる考える。

かほどに深部まで毀損せられた言葉の手当は、外部から加えられたのでは効目が少ない。現実の言葉のひびは、どこから入って来たのか、そこを見きわめて、手当てを施さなくてはならない。それには上下・左右・前後および内外から、言葉の本質を見きわめ且つ考えぬいた先進の努力を一つに集めて、その条理の通らない、とぎれを補い、そのずれたところを直さなくてはならない。

しかし一層重要なことは三方向の会合点がくいつがっていないか、どうか、そこから言葉の全形のつり合いを観取することである。原子理論の権威である湯川博士の「もの皆の底に一つの法ありと日にけに深く思ひ入りつつ」の和歌一首には敬虔な学徒の責任と、学問の厳粛と、真理の威厳の結晶がある。人文科学に於てもこれと少しも異なるところがない。言葉の真相を見るために故らに言葉を毀損する実験を試みられるが、目前にある言葉はその深部まで毀損せられているから、さような手数をかけなくても、その手当さえ加えられたらたやすくもち直すと思う。

教育視察団報告の一節に The time is favorable for taking this momentous step in language reform perhaps more favorable than it will be again for generations. (Report of the United States Education Mission to Japan, p. 19, 1946) とあるのはわれわれの痛感するところである。言語改革を通して精神世界の全広域の新生を敢行するために、この機会をとりはずしてはならない。言葉の力はこれまで考えられたような、過小なものではない。今こそ改めて正しく言葉を見直し明らかに考え直さなくてはならないのである。

3 全形

帝国議會召集の詔書（五月七日）次いで第九十臨時議會開院式の勅語（六月二十一日）は平仮名を用いられた平明な文体で今後一切の法令はこれにならうことになると伝えられる。文化新生は黎明の微風のうちに既に典型的な言葉の風韻をさわやかに文字の間にそよがせている。

このことをもし文体の外面に加えられた補修と見るのであれば浅はかな考えである。それは単に用字用語の改められたいうことに止まるのではない。そこに止まるものは、その語面に反映するうらかな光を見ないのである。その文字の間にあらゆるものの生い立つ力がこもって居ることを感じないからである。この文体の中にこれまでこびりついてる暗い影はうちはらわれ、これから現われなくてはならない明るい姿がほのかに見え初めている。

文化の新生を現前するためにその動力となり媒体となる言葉の真相はこれまでよくわかっていなかったのである。たとえばリスがこれまで行われた「文」の定義を百三十九も拾いにとって見せたように、それほど「文」は何であるかという考え方は動揺しているのである。その定義はどうであろうとも「文」を語の結合と見たり、「語」を文から切りはなしたり、「文」の形と「想」の形とひきさくような言葉の考え方は打ちきらなくてはならない。それがどれほど文化の進展をさまたげ、精神の混乱をもたらすものであるか、もとより一般にはそんなことはどちらでもよいので、「文」を言葉の基本形態と見る（カール・ブルーラー、アラン・ガーディーナー）というような考え方には何のかわりもなかった。しかし、今になって見ると、上述の事例でも察せられるように何時しかそれを乗りこえ、大なる歩を進めて身近まで来ているのである。

毎日の生活の中に何となく気のりがしないとか、気がすまないとかいうようなことがある。また時としては気合がかかったようにすらすると事がはこぶこともある。そうした集合意識態と集合意識性との間には紙一枚のへだたりもないほどの出入がある。それが生命の根源からわき出る補償の力を内にたたえて、精神の世界に於ける分離と混乱を裁き、その均衡と調和を文化の広域に注ぎこむのである。今そうした総合の前兆が先ず公の場に於て、詩や物語の形で現前せられるに至った機微を見つめなくてはならない。

言葉の歴史の示す経験の証跡をたずねると、それは徐ろに来るように見えるが、いつでも身近にあるのである。しかし一たび心の形をまとめる平易な手本が示されると、その力量あることに気づかなかった人々にも、そ

の法（のり）にしたがって、これに乗ったら、創造の可能性を分ち与え、人々相互の間には学び合い話し合いが行われて一つの典型をさえ鑄出すのである（technical inspiration の現象）それは常に文化新生の前兆である。

戦時中に、戦場でつくられた和歌や俳句は、その適例である。その心と詞をつなぐ連絡の充実を目がけて進んで来た跡には、生活の飾りではなく、生命の養いとして、生活様式にしみ入った生命様式の生成がありありと見られるのである。磨かれた言葉はほこりのなかった毎日の言葉とは別のものに見えても、そこから生れてそこに帰る言葉の本質にはいささかのくもらいもない。

教養の言葉・法律の言葉・古典の言葉はいずれも「のり」・「のる」（告る）言葉である。それは一と他・他と一、一と多・多と一の間に於ける普遍の結成の力である。詩の言葉がその特別の言表様式のためにそこから除かれて言葉の片すみにおしこめられるとしたら、それは詩歌の墮落を示すだけのことである。詩の言葉とは何の関りもない。詩の言葉だけはいかなる暴力にも毀たれずに保たれている純粹の言葉である。それは公の場に立たなくては、その本当の姿を現わさない。

またその現われ方が他の言葉と比べて遅速があるのはその実の熟するには機が熟する日を待たなくてはならないから見かけよりも時間がかかるからである。しかしその果実は親しまれ悦ばれ愛せられ、人間への最上の贈物の一つである。これまでの言葉の考え方にはそれが気や風の結晶であるために、それを語感とし、そのあつかいを別にして、この語感の論理にふれないようにしたのはあやまりである。それは風体とか気品とかいう語で示されるように、精神雰囲気の結晶であるから心と詞との構造連関が直接に・豊富に・明白に現前する媒体である。今は何よりも、何時よりも、生命の全形が明かに認められる言葉——詩歌——の生誕を求めなくてはならない時である。

教養の言葉はそれにもおとらず大切な言葉である。しかしその言葉は暗い悩ましい体験の中から流れ出るものであるから、その言表は気むずかしく、とげとげした、かさかさした手ざわりで、近よりにくく思わせるのが通例である。

しかし、大なる時代の転回面に於ける聖人や哲人の言葉は、時代を共にする人々と共に悩み苦しみを同じくする共同体からにじみ出るものであるから、見かけよりもわかりやすく、親切でうるおいがあり、ただちに心に迫る。

る。それにその言葉の背後には自然恐怖・人間恐怖にもふみにじられない不屈の威力が潜むのであるから、簡単であり、至純であると共に平明であり、敬虔な精気があふれて居る。

今の世態は災異・疫病・飢餓・盗賊・抗争におびやかされ、人の心は安らかでない。それと同じ世相に於て、聖者や哲人の語られた言葉が今に生きて今の人に迎えられるのは、今の言葉をしのぎて今の人を生かす力が含まれているからである。

教養の言葉は閑寂の密室から出て、天下の広居に立たなくてはならない。今人々はそうした言葉の告げられる日を耳を澄まして待っているのである。憲、法、教典の言葉は文字の示すように「のり」「のる」言葉である。それが新しく生れんとしているのである。それが生の「のり」として「のる」でなければ虚言である。大なる力が時を刻みて動く。「朝日全形春は定まらんとするなり」（草田男）そこなわれた言葉にのみ氣をとられてとじこめられることなく、大地から萌え出でるさみどりの言葉の野に立つて、大らかな心をとつかえさなければならぬ。

4 四場

言葉の全形を見るには、先ず言葉の契機と要素の結合によりて、その機構の交渉が成立する関係をとらずねなくてはならない。カール・ブローラーは言語理論体系の第三公理として、それを「場」として示したのは正しい。それを（1）A（Akt 作用）（2）H（Handlung 行為）（3）G（Gebilde 形象）（4）W（Werk 作品）の記号で現わし、その四場の組合せによって、相互の関係を示すために四場図式を作った。その図式は挿図

	I	II
1	A	H
2	G	W

（この図表は他の説明とのつり合いのために原図の記号のあり方を変えてあるが、本質にはかわりがない）のごとく、各場をI・II・1・2と連結するのであるが、各場はそれぞれ「場の論理」を展開して、その相互の連関が成立するのである。また別に各場は対角線の方向に於て、A・W・H・Gの連関が成立することを示してあるが、これについては、その論理の展開が明かに説かれていない。もしこの対角線の方向に於てA・W・H・Gが交錯するとしたら、その又状点が象徴場として第五場を占めるのは直ぐ氣のつくことであるがそれにも説明は十分に及ばされていない。しかし、われわれは後に述べるように、却ってその場を重く見るのである。この図式によりて言葉の全形は、各場

の所有する方向的要素の論理の連結から成立つことが観取せられるであらう。またそれによりて各場に於ては、一つ一つの「場」がそれぞれの科学を成立せしめるのであるから、それ等の諸科学の連結を想定せられるであらう。

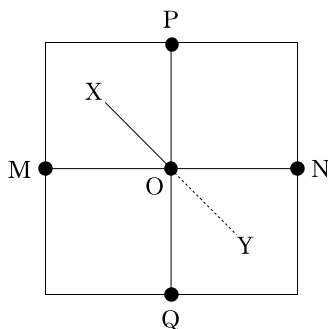
Aを意義学、Hを象徴学、Gを芸術学、Wを文献学とすれば、四場図式はこれ等の諸科学の連関を示し、それ故にその対角線の方向と交錯点をも示すことになるが、これまで、それ等の諸科学は独自の系列によりて自立的に展開せられ、それ等の系統が連結せられて依存的に体系を存立せしめていない。

もしそれ等の連関を意図するのであれば、先づ図式的な交錯点を中心として、それと四場を連結するために、四辺の各辺の中心点を連結しなくてはならない。そこに新しい四場図式が設定せられる。そこでA Hの中間には表現学を、G Wの間には解釈学を、A Gの間には類型学を、H Wの間には様式学を定立することになり、これ等の諸科学にもそれぞれに独自の体系が成立するのである。それ等は方法的補助の役割を負うものと見なされているが、デイルタイ以来、生の三方位として、表現・体験・理会を設定し、その構造連関を基底とする考察は却つてそれ等を前景におし出しているのである。少くとも言葉の全形を把握するには、この論理的連関を基底として観察しなくてはならない。その上に交錯点の中心から、立体的に一連結線を設定すると、左右・上下・前後の三主軸が会合するのであるから、それを座標軸として、考察を更に深く進めることができるのである。

ここには必要以上の図式的説述にまぎれこむことを避けたのであるから、念のために古くから哲学的省察の示標として用いられた、内外統一・身心一如・知行合一のごとき対概念およびその関係概念を示す「一」字を用いて以上の把握に資したい。

これ等の共通する文字「一」が相互に全一を求めるのであれば、それ等はすれたがうことなく自ら三座標軸のごとき地位を占めることになるのであらう。少くとも「道」と称せられる学問・芸術一般は、この諸軸の連結と密接な関係をもつのであるが、文字「一」の解明の観点がどこに置かれようと、究竟に於てそれ等は一点に会合し、そこから放射する射程が広がる。そこに全内実が凝集して求心的・遠心的な動力性が生れるのである。

言葉の全形の見方と考える方は大むねかような手順をつくしたら綜合せられるかと考える。それ故にカール・ブローラーの四場図式のごとき図式的表示を求めるのであれば、Oを中心として、P Q（表現学―解釈学）M N



（類型学―様式学）XY（本質学―律動学）の諸軸を現わし、その内面動力性についてはこれ等の坐標軸の旋回を想察するの外はない。

少くともこれをもつて、言葉の全形は静的でなく動的であり、生命の根源からわき出でる体験流がよどみなく律動することが表示されるであろう。かくて中心点Oを軸心とする極軸の動向が開示せられたら、言葉は主観的存在と客観的存在とを動力学的に媒介すると共に、その相互的規定を顕示し、言葉は文化体系の一員であるのではなく、われわれが早くから提試したごとく「言語文化」として精神世界の最初の基本的・総合的動力であることが認められるであろう。今こそ目前に於ける毀れたた言葉の真实性・信実性・誠実性を恢復するため、ひたむきに、その更生について考察を深めなくてはならない。

5 心象の条理

言語の本質について、歴史的に体系的に考察する一つの精神科学が考えられるに至ったことは決して新しいことではない。

第一次世界大戦以来現時に至るまで、既に言語哲学の再生の時代といわれるほどに、在来の言語概念を更生すべき幾多の貴重な研究が現われている。それには四つの源泉があるといわれている。

第一に言語科学に於て従来の研究の基礎の上に自己を反省し、その独自の研究の取得を期待するほど、その基本的な改革と補足が要求せられ、言語の本質の考察が求められて来た。

第二に思惟心理学および理社会学は言語的思惟に交渉しながら、自己に沈潜するほど、ますます言語哲学の問題に進入した。

第三に新しい論理学は思惟の媒介である言語に近接するほど純粹科学の探究の対象として言葉を深く掘り下げて考察するに至った。

第四にこの世代に於ける精神科学と文化哲学の興隆と共に言語はその大いなる対象となり言語哲学との連結が緊密になった。これを見てこれ等の支流は更に深い同一の源泉から流れ出づるのであることが察せられよ

う。即ち言語の力は主観的存在と客観的存在との対立を動力学的に媒介して精神的活動を統一する。

かくて言語哲学と文化哲学との間に行われる交互的規定の強力な連関が言葉の自省を深め、言葉は世界の最初の原像であり、理論的理性の最初の事行であることが再認識せられるに至った。然るにこうした世界の動きに目もくれないだけでなく、このことを語っても聞入れることを拒みつづけた。しかしわれわれは今やそれを踏台としてそこをも飛躍して、言葉の条理——条理とは珠玉の象面に現われる美しいすじめから比喩的に採用された言語である——を明かにしそれを研ぐために、言葉が固定し持続せられる「文」を採り上げて、そこに明示せられる「文理」の研究を深化しなくてはならない。

国語学、国文学、国語問題、国語教育のごとき共同の目的連関の中に於ける一切の分立は今こそいつまでもちぐはぐであることをやめて、一挙に具体的に統一され、秩序を恢復されなくてはならない。言葉の諸科学——文献学、文芸学さえも——は文理科学に包括せられ、言葉に関する哲学——言語哲学、文芸哲学のごとき——は文理哲学に統一せられ、現時の混乱を離脱し脱化して、新しい国語を生誕せしめ、人文科学の基礎を固めるために、その当然の処理を断行しなくてはならない日が目前にさし迫って来た。

二 言葉の方向

1 公理的仮定 野を行く水の流れには定まりがないように見えても、その動きには自からな方向がある。言葉の方向も、心に思うことを、心に思うままにいい出してもしよいように思われるが、人が言葉を習いおぼえなければならぬということが、すでに言葉はほしいままであり得ない最も強い証明である（ナドラー）といわれるように、人の心と言がよくつり合い、人と人との話合が、ほどよく行われる、言葉のはたらきには自からその方向の定まりがある。

その方向を明らかにするために、その根源（ここに根源というのは起源ではない）までさかのぼって見ると、その条理が認められる。たとえば、「さけび」の一声である。それが危険を警しめる鋭い叫び声であっても、救いを求める痛ましい叫び声であっても、また一しよに仕事を始める時の勇ましいかけ声であったとしても、それを分析すると、（1）事物と（2）意味と（3）音声との三つの要素が認められる。また、それとは全くちがう